

# 図書だより

第62号  
令和2年3月11日  
呉工業高等専門学校  
図書館  
<http://wwwlib.kure-nct.ac.jp>



「彩り爛漫呉の夜」 (撮影：機械工学科1年 杉野 蒼空) 場所：アレイからすこじま公園

## 目次

・巻頭文 「 図書館の思い出 」	.....	図書館長 田中 誠	2
・令和元年度校内読書感想文コンクールの表彰式	.....		3
・令和元年度(第16回)校内読書感想文コンクール			
最優秀賞			
素直な気持ち —「伊豆の踊子」を読んで—		A1 奥田 そら	4
やりがいのあること —「なめとこ山の熊」を読んで—		M2 福垣内 武	5
自分の言語生活を見直す機会に —「やさしい日本語」を読んで—		E3 宮本 大哉	6
優秀賞			
1年生の部	M宇野 夢津樹 M京原 智章 E樋口 登也	.....	7
	C石原 知咲 A加藤 悠雅 A佐々木 悠心		
2年生の部	M下森 悠矢 M宮本 晃希 E新浜 貴翔	.....	13
	C瀬川 泰生 A藏本 さくら A横島 仁胡		
3年生の部	M福井 健太 E町 依落 C小田 悠人	.....	19
	C山本 一稀 C石川 穂乃花 A外村 天音		
・講評	.....		25
・行事報告	令和元年度ブックハンティング	学生会 文化環境委員長 大迫 雄馬	27
	ブックハンティング図書紹介		
・お知らせ	図書館リニューアル, 貸出回数上位ベスト10	.....	図書館 30
・編集後記			

## 巻頭文

## 図書館の思い出

図書館長 田中 誠

2019年夏に改修工事のため図書館が閉館になりました。今回は図書館の無い「図書だより」の発行です。

呉高専の図書館と電気計算機室ができたのは1977年のことです。私が電気工学科4年生のときでした。それまでは管理棟の3階に小さな図書室しかありませんでした。図書館の開館に伴い、学生課も管理棟1階から図書館棟1階に引っ越してきました。電気計算機室には富士通のFACOM230-28Sという中型のメインフレーム・コンピュータが設置されました。記憶容量は64kbyteで、記憶素子は、上位機種は1kbitMOS ICメモリでしたが、28Sは磁気コアメモリでした。32ビット長の単精度浮動小数点の変数でも、2次元配列は[100][100]程度しか取ることができませんでした。

それでも卒業研究で、パンチ・カードにFORTRANのプログラムをせっせと打ち込んで、カードの束を輪ゴムで綴じて受け付けボックスに入れ、自分のプログラムがカード・リーダーに読み込まれるのをじっと待っていました。学生は1日に一回しか実行してもらえないので、文法エラーなど出したら1日がパーになるから、みんな何度も何度もプログラムをチェックしていました。

この頃どんな本が学生に読まれていたかというところ、庄司薫の「赤頭巾ちゃん気を付けて」(第61回芥川賞)、「白鳥の歌なんか聞えない」「さよなら快傑黒頭巾」「ぼくの大好きな青髭」の四部作、小峰元の「アルキメデスは手を汚さない」「ピタゴラス豆畑に死す」「ソクラテス最期の弁明」「パスカルの鼻は長かった」、高野悦子の「二十歳の原点」「二十歳の原点序章」「二十歳の原点ノート」などが思い出されます。

私と同年代の東野圭吾(私が編入した大学は彼と同じ大阪府立大学)さんが「あの頃ぼくらはアホでした」に書いているように、それまでろくに本を読んだことがなかった彼が、「アルキメデスは手を汚さない」を一気に読み終えて、作家までめざすほどのおもしろさだったのです。

これらの本は、今は読まれてないように思います。今みなさんが読んでいるような、「やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。」「Re:ゼロから始める異世界生活」、「とある魔術の禁書目録」、「青春ブタ野郎」シリーズなどは、40年後読まれているのでしょうか？

スター・ウォーズの最初の作品(エピソード4新たな希望)が公開されたのが1977年。スター・ウォーズの完結編(エピソード9スカイウォーカーの夜明け)が公開されたのが2019年。図書館が開館し、改修のため閉館するまでの42年と同じ月日が経ちました。

## 令和元年度 校内読書感想文コンクールの表彰式

令和元年度校内読書感想文コンクールの最優秀賞の表彰式を、12月16日（月）に校長室で行いました。

最優秀賞受賞者は、以下のとおりです。

建築学科1年      奥田 そら  
機械工学科2年    福垣内 武  
電気情報工学科3年 宮本 大哉

受賞者には、賞状及び後援会からの副賞（図書カード）を授与しました。

最優秀賞の他にも優秀賞があり、今年度の受賞者は最優秀賞3名、優秀賞18名、計21名となりました。



校内読書感想文コンクールは、毎年図書館主催で実施しており、今年で16回目になります。

学生は、学年ごとの課題に沿った図書を読み、夏休み中に感想文をまとめて応募します。

- 1年生：課題図書（芥川賞・直木賞受賞作等）
- 2年生：課題図書（外国文学等）
- 3年生：ノンフィクションなど現代社会に関する本
- 4年生以上：自由

次回もたくさんの応募があることを期待しています。

## 令和元年度（第16回）校内読書感想文コンクール最優秀賞

1年生の部

## 伊豆の踊子

川端 康成 著

建築学科一年 奥田 そら

## 素直な気持ち

——「伊豆の踊子」を読んで——

ひとはひとによって変わる。主人公の学生「私」は孤児根性で歪んでいることに悩み、一人伊豆の旅に出た。そこで出会った旅芸人達と共に旅をしていくうちに彼は変わっていく。

彼は旅芸人等のうちの一人である踊子に惹かれた。あの手この手で踊子に近づこうとするものの、どれも踊子の母によって遮られてしまう。それに対する彼の優柔不断ともいえる行動もあり、結局なにもすることができなかつた。そうしているうちに学校の始まりが近づいてくる。旅を続けるお金もなくなる。そんな理由を付け、彼は踊子たちと別れ、東京に帰ることにした。そして帰りの船の中、彼は涙を流す。しかしその涙は私が想像していた涙とは違った。彼は、悲しい気持ちではなく、清々しい満足の中に眠っているような気持ちでいたのだ。

私は不思議だつた。なぜ彼は踊子から離れているのに清々しく思つたのだろうか。私なら、もつと積極的になればよかつたなんて後悔していることだろう。確かに母が娘を守ろうとするのは当然だ。しかしそれを破つてでも、もう二度と会えないかもしれない人のためにできたことがあつたのではないかと思ひ、悔し涙を流すと思ふ。

旅芸人等と共に下田へ向かつていた彼は踊子たちの少し前を歩いていった。すると後ろから「いい人ね」と彼のことを話している声が聞こえた。自分は歪んでいるのだと苦しんでいた彼にとつてそれは、とても心にしみるものだっただろう。周りの人に認めてもらうことの喜びを知つたのだ。

つまり彼は、踊子を自分のものにするよりも、旅芸人等にとつての「いい人」であり続けることを選んだのだ。自分の感情を抑え、踊子を置いてきた。帰り際、踊子は彼に会いにきていた。それでも彼は別れを決めた。彼はさみしい人だと私は思つた。

結局彼は踊子のことをあきらめたのだが、もし私が彼の立場だったらどちらを選んだらうか。きっと私も彼と同じように「いい人」であることを選ぶと思う。もし踊子を選んだとしたら母に生まれ、踊子を頼りにしている旅芸人一行に迷惑がかかつてしまう。踊子になかなか近づけないし、そんな理由をつけて諦めてしまふと思う。でも本当は勇気がないだけなのかもしれない。私は周りに気を遣わず自分の気持ちを優先する勇気がない。結局自分の気持ちより周りからの評価を気にしてしまう気がする。自分の気持ちのまま動けるほうが嘘が無いようにいいなと考えていた。しかし彼の場合、誰かのいい人であることを後悔していないようだ。周りを考えることで彼は自分の価値を確認することができたのだ。そうして彼は孤独感から抜け出していく。

つまり彼は人の親切を素直に受け入れることができるようになっていたのだ。孤児根性を見直すという元々の旅の目的は果たすことができていたのだろう。それに気付いた彼は清々しくこの旅に満足したのだろう。

自分の気持ちに素直になることは大事だと思う。しかし、自分一人で考えこんで孤独になるのはよくない。時には周りのことを優先してみるのも悪くないなと思つた。

踊子の気持ちを考えると少し悲しい結末だが、もし続きがあるならば、もう一度再会してほしいと私は思う。踊子には自由になつてほしいし、今の彼なら人の気持ちに素直でとてもこの先が楽しみだ。

私もどこか旅してみたい。

## なめとこ山の熊

宮沢 賢治 著

機械工学科二年 福垣内 武

やりがいのあること

——「なめとこ山の熊」を読んで——

同じ生き物を殺しお金に換える。聞こえはあまり良くないが、日常では当たり前のように行われている。このことについて、感謝の気持ちや申し訳ないと思う人ほどのくらいいるのだろうか。あまり聞く話ではないがこの作品を読んで熊狩りを仕事とする人の気持ちがわかったような気が少しする。私がこの作品を読んでみようと思った理由は、現代文の授業の中で宮沢賢治の作品に触れ、同じ作者の有名な作品を読んでみようと思ったからだ。

この作品のストーリーは、淵沢川の出ている海坊主のような『なめとこ山』での出来事からなる。そこには小十郎という熊撃ちの名人が住んでいた。小十郎は家族を養っていくほどの田畑や山林がなく、熊撃ちとして働き家族を養っていくしかなかった。

私がこの作品を読んで最も印象に残ったことは『働くこと』と『仕事をする』のの違いである。私はこの二つの違いがこの作品を読んで少し区別できたような気がする。

この作品の中で小十郎は熊を銃で撃ち殺しており、その際、小十郎は熊に言い訳を聞かせて「次に生まれてくる時は熊になるなよ」と語りかけている。殺した熊の顎を小刀で裂き小十郎は山を降りていく。家族の生活を養うため熊の肝と毛皮を

町の商店主に買い取って貰おうと試みるが、思うような価格では買い取ってもらえない。商店主は小十郎にとって、この肝と毛皮に生活に懸かっていると知っているため、足元を見て偉そうな態度をとり二円という破格の値段で買い取った。

ここで、私は『働くこと』とは、お金を稼ぐためだけにしている行いであって、小十郎の望んではいないことだと思った。彼は熊を殺しその肝や毛皮を町の商店人に売りたいと望んでいるわけでは決してない。望んではないが家族が生活していくためのお金を得るために、やむなくしていることである。

またある日、小十郎は山で熊に出会い、熊と話をしている。熊が殺される理由を聞くと小十郎は熊撃ちするのをやめた。その際、熊は次のようなことを小十郎に言った。「二年間し残した仕事を済ませたら、二年目に小十郎の家の前で死んでやる。そして、肝でも毛皮でもあげる」と。そして、二年後、熊は小十郎の家に現われ命を落とした。自分は熊の言う『仕事』とは何なのか作品を読む中で疑問に思った。

おそらく、その仕事というのは熊がやり残した死ぬまでにやりたいことだと思う。なぜなら、自分がその時同じ熊の立場にあった場合、自分の生きがいになって、誰かのためになることをしたいと思うからだ。このことを熊は『仕事』という言葉で表したのだろう。

『仕事をする』ということはお金を稼ぐことだけを目的とするのではなく、自分の生きがいになり、誰かのためになることだと自分はこの作品を読んで思った。

多くの大人は生活するために働き、お金を稼いでいる。中にはこの作品のように、生き物の命を食べ物や毛皮などに換えることを仕事にする人がおり、彼らのおかげで自分が生活できている。自分もこれから数年で社会に出て働くようになるが、自分のやりたい、またやりがいのある職に就きたい。

『なめとこ山の熊』からは、人は自分のしたことを買っているのかどうか、考えて見ることが大切であると感じさせられた。その例として同作では、『働くこと』と『仕事をする』のの違いを教えられた。これから先、生活のためにお金を稼ぐ手段だけとして働くのではなく、今まで積んできた自分の経験を生かすことができ、自分のやりたいと思える仕事に従事できるようにしたい。そして、自分がしているのは『仕事』なのか、それとも『働く』だけなのか考える時間を作り、やりがいを持って充実した人生を歩んでいきたいと思う。

やさしい日本語  
庵 功雄 著

電気情報工学科三年 宮本 大哉

自分の言語生活を見直す機会に  
——「やさしい日本語」を読んで——

私は短波放送を聴く「BCL」を趣味の一つとしている。短波放送は遠くまで届くので、主に海外向けの情報伝達に利用される。アジアの近隣国も日本に向けて日本語で放送しているが、日本も世界に向けて日本語や外国語で短波放送を行っている。それが、東京で番組を制作し、茨城から送信しているNHK国際放送局「NHKワールド・ラジオ日本」である。その日本語放送では、多くの時間はラジオ第一放送の番組をそのまま放送しているが、一部番組は国際放送独自の内容となっている。その独自番組の中で、近年新たに始まったのが「やさしい日本語で“今週の日本”」である。毎週新作が制作され、十分間で一週間の主要ニュースを「やさしい日本語」で伝える番組である。この番組の放送言語である「やさしい日本語」について知ろうと思い、私は庵功雄氏の「やさしい日本語——多文化共生社会へ」を手にとった。

「やさしい日本語」が誕生したのは、阪神・淡路大震災で外国人がいわゆる「情報弱者」となったことがきっかけだった。が、本書では平時の地域社会で共通言語として「やさしい日本語」を用いることによる言語バリアフリーについて論じられている。本書の第一章及び第二章では、遠くない将来に労働力の減少が見込まれる日本で外国人を受け入れる必要性や、「やさしい日本語」の誕生と利用事例を取り上げている。第三章では文法的側面から「やさしい日本語」を解説している。そして、第四章から第六章にかけては、具体的な事例とともに、日本語を母語としない外国人、聴覚障害者と日本語母語話者との情報のやりとりについて、「やさしい日本語」の特性を織り交ぜて論じている。最終章である第七章では、それまでの議論を振り返っている。

多文化共生社会の実現のために、著者は第一章で、我々が外国人を「ともに日本社会を作っていくパートナー」と捉えることが大切であると述べている。私が本書で最も印象に残ったのは、著者が多文化共生社会実現への重要課題を提起する第四章の次の言葉である。

外国人の子どもたちが、努力をすれば日本人の子どもたちと「対等に競争できる」条件を整えること——。「競争」という表現により、社会の一員として外国人を考へることへの強いリアリティが感じられたからである。さらに、第二章で述べられている、地域社会の外国人住民と日本人住民は放っておけば「永遠に会話ができない」くなる、との見通しにも共感を覚えた。また、「外国人の日本語」に文法的誤りが見られても、あげつらうことなく意味を類推する「能力」が必要だとの記述は、日本語母語話者が外国人に公平に耳を傾けるうえでとても重要な考え方であろう。日本語能力で人となりは判断できない。私はこれを、日本語母語話者が非母語話者と会話するために語彙の制限や文構造の簡略化といった「日本語から日本語への翻訳」の能力を必要とする、「やさしい日本語」の考え方を象徴するものであると思う。

本書を通して、マイノリティーとされる人々を地域社会で対等に受け入れることの難しさを改めて感じた。これからの生活では、日本語を母語としない人々をも「対等に競争」を繰り広げる存在として受け入れることを意識していきたい。ところで、我々の学級には留学生がいる。短く区切って伝えること、了解の確認をとること、聞き手になったらあいづちを頻繁に打つことなど、本書で得た知識をもとに留学生への話し方を改善していきたい。また、英語学習においても、第六章にある「自分の考えを相手に伝えて、相手を説得」できることを目指したい。本書を読んだ経験が、「やさしい日本語」の考え方をもとに自分の言語生活を見直す機会になればと思う。

## 優 秀 賞

1年生の部

## 人間失格

太宰 治 著

機械工学科一年 宇野 夢津樹

## 道化に生きる現代

——「人間失格」を読んで——

僕が、この本を読んだ理由は二つあります。一つは、中学の受験期間の時、国語の先生に、「受験シーズンの時に読むと自殺したくなるわよ。」と、言われたからです。その時、さすがにそれは言いすぎではないかと思いましたが、それでも方が一と思いつまなないでいました。しかし、人間というものは、やめろやめろと言われると、逆に好奇心がそそられるものです。だから、受験期間ではなく、かつ読書感想文の題材になる今、読もうと思えました。二つ目は、ネット上で問題作と書かれていたからです。太宰治といえば、「走れメロス」や「斜陽」などの有名作と同じくらい有名なのに、そんなはずがないと思つたからです。

この作品は、第三者目線で語られる「はしがき」、第一の手記、第二の手記、第三の手記、一、二、「あとがき」からなっています。あらずじは、主人公である葉蔵は、常に人間の営みが理解できません。そのため、生活をする中で人と関わる事が恐怖でした。そのため、恐怖を消すために考え思いついたのが、「道化」を演じることでした。そして、道化を演じること、他人と上手に接することができました。また、周囲の人間からも面白い子どもとして思われていました。そんな中、中学に上がった

頃、周囲の人間から自分が「道化」を演じている事に気付かれています。ではないかと思いい、恐怖と闘う日々を過ごすようになります。彼は、また芽生えた恐怖を消すために、次は酒、煙草、女、薬に手を出し、溺れていきます。その結果、精神状態は混乱を極め、ついには心中未遂、自殺未遂を幾度となく繰り返します。しかし、そんな彼も一度は幸せな結婚をし、幸福を手にする事が出来ました。が、その幸せはいともたやすく奪われ、再び精神が不安定になり、あげくに、引受人によって精神科の病院に収監されます。そして、彼は自分が「人間、失格」なのだと感じさせられるのでした。

この作品を読んで、太宰治という人間は、現代人と何も変わらないんだと思いました。この話は、太宰治が生きていたままを語ったものなのだ、読んでいる内に思いました。だからこそ、自分を偽り、周りも騙し生きていく「道化」は、人に嫌われないように仮面をつけ、周りに合わせたり、流されたりすることでしかコミュニケーションをとれない現代人の「ピエロ」と何も変わらないのだと思いました。ふとそこで彼のこの一文、「恥の多い生涯を送つて来ました。」を思い出してください。何が「恥」だったのでしようか。酒の飲みすぎでしょうか。それとも、喫煙のしすぎでしょうか。いや、女に手を出してしまったことでしょうか。薬を使ったことでしょうか。それとも全てでしょうか。みなさんは、どう思いますか。僕は、そんなことではないと思います。たぶん、「道化」を演じてきたことだと思います。自分を偽り続け、他人に自分らしきを見せられなかったことが「恥」だったのだと思います。もし、僕が思ったことが正しいのなら、太宰治がこの作品で伝えたかったことは、現代においても、とても難しい生き方で、大切な問いだと思います。彼にとって、「道化」が彼の「恥」なのだしたら、みんなに、

「自分を偽るな。他人に合わせるな。」  
と、伝えたかったのだと思います。この現代社会において、自分を偽ることはかかせません。しかし、それだけではないけないと思います。偽ることは、コミュニケーションをとる時に、だれでもする行為です。しかし、葉蔵のように、自分には苦しみしか得られませんが、だからこそ、自分を偽り続けるのではなく、時には本当の自分を出さなければ、良い関係を築けないと思います。僕も、この事を念頭に置いて、生きていきたいと思いました。

## 人間失格

太宰 治 著

機械工学科一年 京原 智章

## 人間不合格

——「人間失格」を読んで——

私はこの話に「感動」しなかった。決して面白くなかったという訳ではない。今まで読んだ本の中でもっとも面白かったし、今後様々な本を読んでも、人間失格ほどの作品には出会えないとさえ思った。けれど、少したりとも心を動かされたりするなどということはなく、感動をするという気にも全くなれなかった。それどころか、この話に共感するような人にはなるべきではないと思ってしまうのだ。私には、自分自身がそう思ったことが衝撃的だった。何故かという、今まで私にとって、面白い作品と感動する作品は全く同じものだったのだ。面白さと感動はイコールで結ばれるべきものであって無関係なものではないという私の認識は音も立てず崩れていった。そして、なにより、感動できないのに面白いということが面白く感じた。

私がこの本を選んだのは、昔一度読んだことがあったからだ。中学一年生の頃題名に惹かれて、図書館でこの本を借りて読んだのを覚えている。そして、三年ぶりに読んでみると、同じ本だと思えないほど違う内容に感じた。本の内容が変わる訳はないので、三年間で変わったのは、私の方らしかった。前に読んだときには何一つ感じなかったというのに、今の私にはとても面白かった。三年前に読んだのは、文章をただ見ただけで、今回初めてこの本を「読んだ」のかもかもしれないと思った。読み終わって最初に思ったのは、この本は場面一つ一つを切り取って、その場面ごとに自分が感じたことを人に伝えるのが難しいということだ。何故かという、

私は、この話はいくつもの場面から構成されたものではなく、最初から最後までがひとまとまりだと思ったからだ。だからこの話から一つの出来事を取り上げて感想を書くこととしてしまうと、その時点でそれは「人間失格」ではない何かに変わってしまうように思えた。この話は、一人の人間の人生が書かれているのだから、他の物語のように「この場面、自分なら」というようなことは考えるべきではないのだ。考えることが許されるとするなら「これが、私の人生なら」ということだと思う。私には、この物語を場面で捉えるということは、人の人生に介入することと同意義で、それは許されないとだと思えた。だから、この物語を語るための最小単位は、文でも段落でも文章でもなく「人生」であるべきだと思った。人間失格がどういった物語であるかということは、あらずじや重要な部分だけを説明したとしても伝わらない。それはやはり、この物語が「人生」を書いたものなので、全て読んで初めて知ることができるからだと思う。

けれど「もし自分の人生なら」ということを考えたところで、私には答えを出すことが出来なかった。まだ十五年しか生きていない私には、他人の人生に意見を言うことは難しかった。なので、いつか年を取ったときにもう一度読み返そうと思う。けれど、今だからこそ、十五年しか生きていなくて人生がどのようなものかまだ知らないからこそ言えることが一つある。葉蔵は、人間失格などではないのだ。自分自身のことを人間失格だと評したが、それが何より人間らしく見えた。逆に完璧な性格の持ち主で、自らのことを人間合格とと思っている奴のほうがよっぽど道化ではないだろうか。もちろん、私がまだ若いからそう感じただけかもしれない。だからこそ、これが正しいのかどうか答え合わせが出来るように生きていきたい。

私には葉蔵は人間失格には思えないけれど、かといって合格というのも少し違ふと思つた。これほど人間らしくて、それでも自分を人間と思えなかった彼は「人間不合格」くらいが丁度良いのではないかと感じた。

## 黒い雨

井伏 鱒二 著

電気情報工学科一年 樋口 登也

## 戦争の傷跡

——「黒い雨」を読んで——

私は幼い頃から、このヒロシマに住んでいる。県内では、小学校から多くの平和学習が取り入れられている。最も大きな要因は、誰もが知っている。第二次世界大戦での、原子爆弾投下だ。これによって兵士のみならず一般の人々までが巻き込まれ、十四万人以上が亡くなったという。その後広島市の町には、大量の放射線が残り、雨は黒く染まったという。

広島県出身の作家、井伏鱒二の「黒い雨」は、そんな広島市の町中での物語だ。始まりは原爆投下から数年後の広島県東部、神石郡小島村。主人公の閑間重松と、その妻シゲ子は戦時中、市内で被爆していたため、後遺症で重労働ができずにいた。養生のために働いても、口さがない村人からは怠け者扱いされてしまう。そこで重松は、被爆者仲間と共に鯉の養殖を始めようとする。

一方で重松は、同居する姪、矢須子のことでも頭を痛めていた。婚期を迎えながらも、縁談が持ち上がるたびに被爆者であるという噂が立ち、縁遠いままなのである。しかし実際のところ、その日の朝、重松は横川駅、シゲ子は千田町の自宅でそれぞれ被爆したものの、矢須子は社用で遠くの離れた場所におり、直接被爆はしていない。それにも関わらず、縁談が持ち上がるたびに「市内で勤労奉仕中、被爆した」とのデマが流れ、破談が繰り返されていた。そんな中、矢須子にまたとない良い縁談が持ち上がる。この話をせひまとめたい重松は、彼女に厳重な健康診断を受けさせた上、当時の日記を取り出し、清書しようとする。それは、矢須子が原爆炸裂時、

広島に居らず被爆者ではないことを証明するためだった。

しかし、実際は、矢須子も重松夫婦の安否を確かめるため船で向かう途中、瀬戸内海上で黒い雨を浴びていた。さらに再会した重松らと市内を逃げ回ったため、結果的に残留放射線も浴びていた。重松がこのことを書くものか迷っている間に矢須子は原爆病を発症。医師による懸命な治療もむなしく、病状は悪化し、縁談も結局流れてしまった。

八月十五日までの日記を清書し終えた重松は、鯉の養殖池から向かいの山を見上げた。空には奇跡の虹を想像し、その虹に矢須子の回復をひたすら祈るのだった。

この物語は、実際の被爆者、重松静馬の「重松日記」と被爆軍医、岩竹博の「岩竹日記」を基としている。もちろん、主人公の名も重松静馬が基となっている。

初めに述べたように、私たちは幼い頃から平和学習をしている。この原爆についても何度も考えてきた。しかしこれまでは主に、戦時中の人々についてが中心だった。それに対して、この物語は戦後の苦しみを中心としたものである。「原爆の被爆者」という肩書を戦争で付けられ、周りから差別され、幸せを掴むことのできない矢須子。それを見守る伯父伯母の心情を考えるとなんと切なく感じる。よく考えてみれば、矢須子が残留放射線や黒い雨を浴びてしまったのも、夫婦の安否を確認しに行ったためだ。もしかすると、二人はそのことを悔やんでいたのかもしれない。そして、その事実を書くべきかということも、深く悩んだに違いない。原爆症を発症してしまつた矢須子にやり切れない思いを抱いていたかもしれない。そんな一人の思いは、この後、天に届くことがあるのだろうか。読者である私たちも、そのような淡い期待を抱いてしまっている。それだけ、人の心理に深く感じさせるものが、この物語にはあるのだろう。

私はこの「黒い雨」を読んで、戦争は終わっても尚、人々に深く、治らない傷跡を残してしまうのだと知った。誰もが言う「戦争は良くない」というセリフも、ただの言葉でなく、これからは心から言えるだろう。

## 伊豆の踊子

川端 康成 著

環境都市工学科一年 石原 知咲

## 素直な心

——「伊豆の踊子」を読んで——

人は、どうしたら人の親切を素直に受け入れられるようになるのだろうか。

「伊豆の踊子」。タイトルの踊子がきつと美しいに違いない。そんな風に思い、気になったのがきっかけでこの本を読むことにした。

この物語は川端康成の作品である。ざつくり言うと、伊豆へ一人旅に出た主人公の青年が、旅の途中で出会った旅芸人一座と共に旅をしていく話である。

主人公は孤児として育った二十歳の青年である。ある時孤児であるために歪んでいる自分の性格に気づき、それに嫌気が差して一人旅へ出た。

きつと主人公は孤独を感じていたに違いない。旅へ出てたくさんの人と出会って孤独を埋めようとしたのかな、と想像した。

主人公は旅の途中で出会った旅芸人一座の踊子に一目惚れし好意をよせていく。そして彼らと共に旅をしていくことになる。

踊り子の容姿の描写で、「この美しく光る黒眼がちの大きい眼は踊子の一番美しい持ちものだ。二重瞼の線が言ひやうなく綺麗だ。それから彼女は花のやうに笑ふのだ。とある。この描写から踊子の可愛らしく美しい容姿がひしひしと伝わってくる。また純粹無垢な性格さえもがこの文から感じられる。自分が主人公だったらきつと同じように一目惚れするだろうと思う。また女の自分からして、自分も花のように笑うことのできる素敵な人になりたいと思う。

旅芸人一座は二十五、六の男が一人、四十代の女が一人、若い女が二人、そして

踊子がいる。物語のはじめはこれだけの情報しかなかったが、主人公が彼らと親しくなるにつれて彼らの関係性が明かされていく。男と上の娘が夫婦で、上の娘の母が四十代の女、男の妹が踊子である。もう一人の中の娘は雇われている芸人である。

ところどころ周りの人が芸人を軽蔑しているような表現が出てくる。これらから芸人たちは周りからあまりいい目で見られていないことが分かる。しかし主人公は彼らと親しく過こしていき、踊子に「いい人」と言われる。この一言で主人公は素直に自分をいい人だと感じることができた。主人公は自分が歪んでいる、と悩んでいたが、彼らと触れあつていくうちに素直になつていつているように思えた。踊子にほめられて自己肯定ができたのかな、と感じた。

主人公が芸人らと別れ、帰りの船の中で青年から親切を受け、涙を流すシーンがある。自分に人の親切心を自然に素直に受け入れる気持ちがあることに気付くことができたのである。主人公は歪んだ心を克服し素直になることができた。

旅芸人らと旅をし、彼らのやさしさや踊子の純真さに触れることで、心が癒され自分の嫌な歪んだ心や孤独感を克服し、素直になれたのだと思う。

私はこの物語を読んで、人は人に癒されて素直になれるというように感じた。また素直になれば、自分のよさも見ることで、自分を肯定できるようになつていくように思えた。

人と触れあい自分のよさを受けとめられるようになる。そうすることで人は人の親切を素直に受け入れられるようになっていくと思つた。自分を認められなければ親切を受けても「相手に迷惑」「自分なんか」と素直になれないが、自己肯定できればありがたく受け入れられると思う。

自分も素直でありたい。また、人を癒せるような人でありたい。

## 海と毒薬

遠藤 周作 著

建築学科一年 加藤 悠雅

## 人間とは何か

——「海と毒薬」を読んで——

まず、「海と毒薬」がどのような本なのかを紹介する。この本は遠藤周作の作品であり、戦争末期に九州の大学附属病院で起こった、米軍捕虜の生体解剖事件を題材としている。恐ろしい内容の作品である。

私がこの作品を選んだ理由は、「海と毒薬」という強烈なタイトルが頭から離れず、内容が気になったからだ。また、戦時中に起こった出来事を題材にしていたため、ヒロシマという平和都市に住む者として読まなければならないという使命感を持ったからだ。

この作品を読み終わった時に、「とても恐ろしい。」という感想が芽生えた。しかし何度も読み返すうちに、人間の腹黒いところが描かれているのではないかと感じた。なぜかという点、主人公も生体解剖をする前は、「人を殺してしまうと、どうなるのだろう」という普通の感情を持っていた。しかし、時は戦時中であり、人を殺すことが当たり前な時代だったため、人体実験や生体解剖につかわれるアメリカ人捕虜に対し、「人ではないもの」として扱いながら解剖を行っていくようになったからだ。

私がこの作品の中で最も心に残っている言葉は、医学生生の戸田が、自分自身について語っている場面です。「他人の目や社会の罰だけにしか恐れを感じず、それが除かれれば恐れも消える自分が不気味になってきたからだ。」という、自分の書いた手記に対しての言葉である。この言葉に対して私は、「今の自分とそっくりでは

ないか」と感じた。なぜなら、「他人の目」を「他人からの評価」に置き換えた際に、他人からの評価ばかりを気にして、失敗を恐れ、新しいことに挑戦せず、安定ばかりを求めている自分にそっくりだったからだ。また、この言葉の前後から分かるように、戸田は「相手よりも、自らの安全が第一である」という自分と似たような考えを持っており、その様な点に関しても「そっくりだ」と感じた。

私の心に残っている言葉がもう一つある。それは、生体解剖において傍観者であり続けた勝呂の「考えても仕方ないこと。俺一人ではどうにもならぬ世の中なのだ」という言葉だ。この言葉は、目の前で人が殺されている状況から目を背けた言葉ではないかと思う。実際に私も似たような体験をしたことがある。それは、課題だ。まさに勝呂のように、色々な事由を言い訳にして、「課題をしない」ことを正当化するという体験だ。

私はこの二つの心に残った言葉を通して、人間とはほとんどの物事に対して、自分の都合よく解釈してしまう生き物だと思った。戸田や勝呂のように、さまざま言い訳をし、自らの考えを正当化しようとしているところからその様に感じた。私は、「都合よく解釈する」ということは決して悪いことではないと思う。しかし、言い訳に言い訳を重ね、自らの都合の良い解釈を正当化してしまうことに関しては悪いことだと考える。なぜなら、社会に住むすべての人が解釈を正当化してしまうと社会は確実に荒れると思うからだ。そのためにも、全ての人が自らの解釈に対して疑問を持たないといけないのではないか。

私は「海と毒薬」を読んで話を理解していくうちに、「海」というのは、自らの住む社会。「毒薬」というのは、自らの正当化してしまった悪事という考えが生まれた。何人かが海に毒薬を垂らしても誰も気づかないだろう。なぜなら実際にそうだからだ。しかし、毒薬を垂らし続けると、いつかは気づいてしまう。そうならないためにも、自らの悪事はきちんと戒め、少しでも海をきれいなままで保てる様な人間になりたい。

## 地獄変

芥川 龍之介 著

建築学科一年 佐々木 悠心

## 執着心と理性の狭間で

——「地獄変」を読んで——

良秀はなぜ最愛の娘を見殺しにしてまで絵を完成させたのだろうか。良秀の日々の生活からすれば彼女の存在だけが唯一の人間らしくいられる世界であったはずだ。決して彼女の命が良秀にとって軽々しいものではない。それなのに良秀はなぜ娘のこゝろを見殺しにしたのだろうか。それには自分は二つの理由があると思う。

一つ目は、芸術心に飲みこまれたということについてだ。彼も、心から娘を見殺しにしたいわけではなかっただろう。最初から自らの作品のためなら何を犠牲にしても構わなかったことはないはずだ。芸術心に心を飲みこまれたからではないのかと自分は考えている。彼は日頃から自らの作品の完成に異様なまでに固執していた。作品の完成という事柄は彼にとって何よりも優先したいものとなった。そうやって絵師の道を極めれば極めていくほど技術や能力は向上していくが、それに反比例して彼の中にある道徳心や人間味は薄れていってしまう。これは絵師だけに言えることではない。どんなことでも何かを極めることはすばらしいことだ。しかし、それに固執してしまうと物事の本質を見失い、本当に大切だったものさえも忘れてしまう。良秀の中にあつた道徳心や人間味は彼自身が固執している狂気に飲みこまれたのではないだろうか。

二つ目は美の誘惑に負けたということについてだ。良秀は自らが描いた絵に美を見出すことで価値をつけていた。地獄絵の屏風は彼の最高傑作であると言われている。良秀は、どうしても最高傑作を完成させてその美しさを自分の目で確かめたい

とずっと思っていたのだろうか。だんだんと芸術心に飲みこまれていく中でいろいろなものを自らが求めた美への犠牲としていった。そんな中で娘という存在は彼にとっての歯止めになっていたのではないかと自分は思う。しかし、そんな娘が炎の中で死んでいく姿を見てとうとう良秀の心は完全に狂気に染まってしまった。美への欲求が増す一方で良秀の理性は薄れていく。良秀が到達したその領域は人間では辿りつくことのできない境地だ。地獄変という完璧な芸術が完成したあの日は彼が人間であることを辞めた日だと思われる。しかし、生涯をかけて追い求めた美のために愛する娘を見殺しにする。果たしてそのようなものを美といえるのだろうか。自分は良秀の求めた美を価値があり、尊いものだと認めてはいけないと思う。認めてしまうということはすなわち、良秀の狂気や芸術思想を支持する形となってしまうからだ。自らが求める美を至高のものとし、それを理由に人の命を奪う芸術を自分は美とは思えない。良秀は芸術に支配され、人間性を捨てたのだと考えた。

今回、この「地獄変」を読んで自分は良秀の芸術に対する極度の執着心から一つのこと固執することの恐ろしさを考えさせられた。何度も言うが極めることは本当にすばらしいことだ。誰しもが簡単にできるようなことではない。しかし、一つのことを極めるのと、固執するのでは全く意味が違う。今まで極めてきたものが固執するものへと変化してしまう。それはあまりにも悲しく虚しいことだ。自分も日々の生活をふり返ってみると一つのものに囚われて周りが全く見えていない時がある。目先のことを考えず、多くの人やものを傷つけてしまった。自分は自らのために周りを犠牲にしているのか、本質を見極められているかを正しく判断することの大切さを学んだ。

## 星の王子さま

サン＝テグジュペリ 著

機械工学科二年 下森 悠矢

## 数よりも重要なこと

——「星の王子さま」を読んで——

私がこの本を手にとった理由は、この「星の王子さま」が幅広い年代の方に長い間愛され続けている名作であることを知りながら、未だにあらすじさえ知らず、全く読んだことがなかったからである。本当に全く知らなかったもので、この本はありふれたSF小説みたいなものだろうと思いつつ読むと、想像していたものとは全く異なっていた。そこには、主人公と王子さまの温かい人柄が生む平和な世界があった。そして、それらを通して、凝り固まってしまった世界中の「大人たち」の考えに、一石を投じた作者の姿があった。小さな子どもにも理解ができるほどシンプルなやり取りの中で、人生を歩むということの本質を改めて思い出させてくれる本は、恐らくこの本だけだろう。

主人公である「僕」は、あるとき、飛行機で砂漠に不時着し、一人でエンジンを修理しようとしていた。その時、どこから現れたのか分からない小さな男の子に会う。その男の子こそ、小さな星からやってきた王子なのである。子どものような純粋な心を持った王子さまと関わっていくうちに、忘れかけていた、数値では表現できない物事の本質を思い出し、王子さまの旅の中で描写されている人物は、筆者の考える「大人」が具現化されており、ストレートな表現で伝わりやすくなっている。純粋な心を持った子どもの象徴として表現されている王子さまの

「大人って変わってるな。」

という言葉で、実績・名誉・権力などに寄りすぎりおぼれて生きていく大人たちには子どものような純真さは無い、という筆者の考えが容易に読み取れる。

冒頭で、「僕」が描いた象を丸飲みにしたボアの絵を帽子に見えると否定され、そのうえ、絵なんか描いていないで、算数や文法などを勉強しろと言われるという場面がある。この場面は子どもが純粋な心や想像力を失っていく、まさにその瞬間を描写しているように、王子さまこそ出ていないものの、印象に残った場面の一つだ。大人は、彼らの考える正しい道へ、子どもたちを導こうとする。しかし、実績・名誉・権力などにおぼれた大人たちは、本来、人が持つべき想像力を物事を考える力に圧力をかけて、勉強をさせ、沢山のそういう大人たちの作ったルールに沿わせて、成長させようとする。

こうしたことは、悪いことだと、断言できることではない。だが、著者サン＝テグジュペリの生きた時代より、子供の持つ限らない想像力を活用するべきであるのが、今の時代なのではないのだろうか。人の敷いたルールの上を歩む人生は、確かに実績・名誉・権力などを手に入れることは保障されているかもしれない。しかし、それ以上に大事にされるべき、人間が本質的に持つ感情—喜びや嬉しさなどを手にするには、自ら考え、自ら実行することが必要であると私は考える。人と違うことを成し遂げるためには、素晴らしい想像力が必要とされる。実績や名誉にとらわれず、自ら疑問に思ったことを自らの想像力を駆使して解決していく精神は、大人たちのそれらにとらわれた不純な精神に削られてしまっているのかもしれない。

この作品が長い間人々に愛されてきた理由は、著者サン＝テグジュペリが先の時代に大人が子どもの想像力を奪ってしまっていることに気付き、温かい人柄の登場人物を用いて読みやすい文章で且つ的確にこの問題について指摘することで、感動のできるストーリー性を持った、印象に残りやすい作品に仕上げたところにあると思った。私はもうすでに子どもの頃持っていた想像力を失ってしまったかもしれない。まだ残っているかもしれない純粋な心を以って自由な発想で物事を捉えられる人間でありたいと思った。

## 人間の土地

サンIIテグジュペリ著

機械工学科二年 宮本 晃希

## 精神の風

——「人間の土地」を読んで——

飛行機というのは乗り物の中でも特別な存在だと知った。それは、唯一、人間にはできない移動方法を可能にした乗り物だから。車は単に人間ができる歩くということを増幅したにすぎない。一方で飛行機は、飛べない人間を飛べるようにしてくれた。同時に、地球の別の姿を見せてくれる。

サンIIテグジュペリの時代の飛行機の存在は、特別な存在であり、今よりもっと危険な存在だった。よく墜落するし、管制も今よりいい加減なように見えるし、不帰順地域という墜落すると現地民に殺されてしまうような危ないところが多かったからだ。

飛行士として大自然の脅威をたくさん経験してきた、サンIIテグジュペリは何を思い、何を私たちに伝えたかったのだろうか。

物語をはじめ、作者がラテコエール社に入社したばかりの駆け出し飛行士であったころの思い出から始まる。明日、いよいよ自分が操縦するという、誇りや責任感、不安感が書かれていた。この当時の飛行士という職業は現代でいう宇宙飛行士のよくなものだろうか。まだ人間が踏み入ったことのない謎の多い世界に行くことは、確かに誇りや臆病の気持ちでいっぱいになると共感した。

作者は飛行機がはじめて見せる地球の姿について語っている。

道路は不毛の土地や、石の多いやせ地や、砂漠を避けて通っている。多くの果樹園と、多くの牧原ばかりの道路を歩いてきた。そしてこの地球を、ぼくらは、温潤

なやさしいものだとばかり思いこんできた。ところが、飛行機のおかげで、ぼくらは直線を知った。そしてその直線から発見する、地表の大部分が、岩石、砂原、塩の集積で、ぼくらの生命は地表のほんの一部で花を咲かせているという事実を。

私は命の危険を伴う仕事だったという理由もあるだろうが、職業をそこまで哲学、精神的なものにまで高めることができるのかと感じた。また、飛行士として文学者としての人生を同時に全うしたサンIIテグジュペリという存在がまさに時代の運命の象徴であると感じた。

作者はこの作品のなかで、社会の流れに巻き込まれた人々に対し警鐘を鳴らしている。そして、教養とは公式を鵜呑みにすることではないということを伝えたいのだと思う。

私たちは、過去の偉人であるニュートンやパスカル以上の知識がある。しかし、彼らの知識以上に私たちの精神力は養われているのだろうか。精神力と知識は違うもの。精神力とは、指針のない状況で、自分の信じるものに対し、進んでいく力だと思ふ。過去の偉人達は先達もおらず、周囲からの理解がないなか、それでも自己の考えを深めていった。私は数学の公式を理解せずに記憶していただけだった。新しい公式を記憶し、知識は増えた。だが、なぜこの公式になるのかを理解することを省いたせいで、精神力は一つも進歩していない。

このままでは、莫大な知識を持っていても、精神力が弱い人々でいっぱいになってしまう。

そうなってしまう状況で、人の力が及ばないもの、大自然の脅威に対面した時、どう私たちはそれらと向き合えるのだろうか。命があっけなく散らされていく状況で、どうやって人間の尊厳を保つのか。

サンIIテグジュペリは、飛行士として大自然の脅威をたくさん経験してきた。この危険な職業をとおして、人間の尊厳について語っていると考えた。

それらを全て凝縮したのが、最後に書かれてある、

「精神の風が、粘土の上を吹いてこそ、はじめて人間は作られる」という言葉に繋がっていると感じた。

## 異邦人

アルベール・カミュ 著

電気情報工学科二年 新浜 貴翔

## 自分らしくあるために

——「異邦人」を読んで——

母の死の翌日に海水浴に行ったり、喜劇映画を見たりした後、友人の人間関係のトラブルに巻き込まれ、人を殺害し、動機について「太陽のせい」と答える。死刑だと判決がなされた後も上訴することなく、自身は幸福だと感じて、処刑の日に大勢の見物人が増悪の叫びをあげて迎えてくれることを最後の望みとする。

このあらずじを読むだけだと「主人公のムルソーは非常識な人間だ」といったような否定的な考え方しか浮かばないだろう。私もこの小説を読む前はそうであった。しかし小説を読み進めていくごとに、どこか違和感を覚えるようになっていった。そして最終的にはムルソーのことを肯定も否定もできなくなってしまったのだ。そうなるってしまったのはなぜだろうか。その理由は作者の技量によるものもあるはずだが、一番の理由はムルソーの言動にはムルソーなりの論理があることに気づかされたからなのだろう。

母親の死の悲しみから、普段の生活を送れなくなることは当然だろうし、それが常識というものだ。しかしいくら嘆き悲しんだところで、母親は生き返ることはないし、今まで起きたことを変えられるわけでもない。そういう視点でムルソーの言動を観察すると、彼はただ合理的に過ごしてただけではないのだろうか。ムルソーからしてみれば「あなたたちの常識を自分にまで押しつけるな！」ということだろう。それとは逆にムルソーからすると殺人の動機が「太陽のせい」であることは論理的に正しいのである。つまり、少数派の常識が、多数派の常識によって押し

つぶされたということである。ムルソーの最後の望みは自身が「異邦人」とみなされたことによる諦めに由来するものだったと思われる。

「常識とは十八歳までに身に着けた偏見のコレクションのことをいう。」これはアインシュタインの名言のひとつである。この言葉からも、常識を押し付けることは考え方の多様性を阻害することがわかるだろう。人生で関わるすべての人の価値観が同じである世界は一見すると完璧に見える。しかし、そこには感動も無ければ、新しい発見もない。極端に言ってしまうえば絶望である。自身の価値観を大切にして、自分なりに育んでく。これが個人を個人たらしめているものであり、私がムルソーを肯定する理由である。

では逆に私の中でムルソーを否定している考え方は何なのだろうか。それは「常識」の根本的な意味を知ることと明確に説明することができた。常識とは辞書によると「社会を構成するものが有して当たり前のものとなっている、社会的な価値観、知識、判断力のこと」だそう。つまり自分のおかれている社会集団によって、常識はいくらでも変わる。ムルソーは母親の死に対して、感情を抑える必要がなく死はない方がいらいにしか考えていなかった。それは彼が成長していく過程で母親から所謂「無償の愛」が注がれていなかったことが原因なのではないだろうか。愛のない家庭で育つことで、世間一般とは異なる常識を身に付けて成人してしまったであろうムルソー。彼はある意味哀れだったのかもしれない。彼が受け取ることが出来なかったものが、社会生活を営む上で最も大切なものだから。

つまり完全に自分らしくあることも、完全な社会集団を形成することもできないのだ。よしんば出来たとしても、それは一辺倒で柔軟性がなく、渺茫な世間の前には無力なものだろう。しかし、自身の中で折り合いをつけることは出来ると思う。私が私らしくあるために、自身の価値観と世間の常識の両方が納得できる点を見出し続けていきたい。十八歳を超えたとしてもそれは可能はずだ。

## 異邦人

アルベール・カミュ 著

環境都市工学科二年 瀬川 泰生

## 不条理な世界

——「異邦人」を読んで——

「きょう、ママンが死んだ」この文章で始まる小説「異邦人」はカミュの代表作であり、人間社会に存在する不条理について書かれたものと言われている。この文章から始まる物語の展開が気になったというのが同書を選んだ理由である。この小説には、冒頭の一文のような強烈で印象的な表現が他にも用いられている。

「太陽のせいだ」有名なこの言葉も強烈で印象的な表現である。これによってムルソーの非人間性を感じさせられる。そして、ムルソーを取り巻く数多くの不条理によつて、その非人間性が強調されているように思う。作者はこの不条理を通して、読者に何を伝えたいのだろうか。また、この物語の最初と最後の部分に注目すると、母の死について触れられていることが分かる。ムルソーにとって母の死は何を意味したのだろうか。

不条理は、表面的な見方しかない司法、届かないムルソーの抗弁、機械的に進む手続き、歪んでいく真実など随所にみられる。ムルソーは殺人をきっかけに、母を悼まなかったことに対して死刑宣告を受ける。これが一番の不条理であると思う。この不条理は、ムルソーの価値観を否定するものである。ムルソーは母の死に何の感慨もなく遊びふけたり、太陽がまぶしかつたから人を殺したり、死刑を目前にしても飄々としていたりする。これらはどれもムルソーにとっては当たり前のことであるが、周りはこれを理解できない。このようなことは、現実にも起こりうると思われる。実際に、現実世界にムルソーのような人がいたとしたら、私たちは理

解することができようだろうか。私は理解に苦しむと思う。それは、私たちが自分の価値観がすべてだと思ひ込み、勝手に皆が同じ価値観であると認識してしまっているからだと考えられる。私たちにとつて、多数派の価値観が常識であり、言い換えれば宗教のようなものである。作者のカミュは、こうした既存の価値観に疑問を投げかけているのではないだろうか。

文章をよく読んでみると、ムルソーの母への誠実な態度が見受けられる。ムルソーは、今でも母の部屋を使つており、母のベッドで寝ていること、そしてサラマンという人物の言及から、ムルソーは母を非常に愛していたことが分かる。しかし、常識とは異なる愛のかたちであつたために裁判では信じてもらえなかった。これもまた不条理である。愛していたことと、母の死に涙を流すことは全く関係がない。このように考えるムルソーは非常に合理的であると思う。そんなムルソーは母の死を受け入れられなかったのではないだろうか。冒頭部分、結局ムルソーは母が死んだのが昨日なのか、今日なのか分からないように思える。そして、末尾部分、「永遠に無関係になつた一つの世界への出発」とは、宗教や常識にとらわれている不条理な世界から解放されることだろう。ムルソーは自分の死を目前にして、母の死をようやく受け入れ、一体となつたように感じたのだろう。ムルソーにとって母の死は不条理な世界の暗示だったのでないだろうか。

この小説は、ムルソーを中心に、不条理な世界が取り巻いている。そしてムルソーは感情が欠如しているかのように描かれている。淡々と感情の起伏なく描かれているムルソーだが、なぜか心情が分かつてしまう。私はここに強い感動を覚えた。特に裁判の検事に言い返したくなる心情はよく理解できる。このような体験は、今までに読んだ本の中で初めてだつた。これが「異邦人」の面白さであり、芸術性であろう。また、この小説は面白さと同時に、メッセージ性を持ち合わせていると考えられる。読者によつて受け取り方は違ふと思われるが、私は次のように捉えた。

世界は不条理で満ちている。

## 星の王子さま

サン＝テグジュペリ 著

建築学科二年 蔵本 さくら

自分らしく、

——「星の王子さま」を読んで——

「子どもだったすべての大人へ。」

もう子どもではなく、でも大人にはなりきれない十七歳の私には気づかされたこと、響くものが沢山あったこの一冊の本。『星の王子さま』大人になる私にとって大切なものばかり教えられたのがこの物語だ。

物語は六年前、砂漠に飛行機で不時着した「僕」が、「星の王子さま」に出会うところから始まる。元々いた惑星にあった唯一のバラとけんかして星から飛び出した王子さまは六つの惑星を巡り、地球にたどり着いた。六つの惑星で出会ったのは、権力を見せつける王さま、人気者になりたい大物きどり、酒という快楽に溺れる酒びたりの男、財力がすべてだという実業家、休むことなく働き続ける点灯人、そして学問を取り柄にする地理学者だ。どの人たちも、この地球にありふれている大人と変わらないように思えた。誰だって人望、財力、知識は求めるものだし、欲しいのは当たり前だろう。働くのが大人の仕事、酒などは大人の特権だとも思っていた。しかし、王子さまは「自分自身以外のことを一生懸命やっていない」大人たちを「まらぬ」と言った。

王子さまは素直な子だ。自分が思うことはまげない。そして、惑星にあったバラのことをずっと思い続けている一途な子だ。そんな王子さまが、地球に来て驚いたのは、唯一の存在だと思っていたバラが、実は何千本とあるありふれたものの一つだったということに気づいたことだ。確かに、数や見た目に目を向けると、あのバ

ラもただのありふれた一本のバラだろう。しかし、王子さまは思い出す、バラを大切に育てていた時間や一緒に過ごした日々を。王子さまはその時、自分が愛を持っているバラが本心に特別だと気付いたのだ。

「いちばんたいせつなことは、目に見えない。」

大きくなるにつれ今まで知らなかったことが分かるようになる。新しいことが見えるようになることは、世界が広がるよううれしかった。でもその分、今まで大切にしていた目には見えないものを忘れていたのかもしれない。今ではほとんど書かなくなった手紙も、昔は誰かに渡すのが好きだった。今、思い返せば相手への感謝など想いを形にできるものだったからかもしれない。毎日、忙しい日々を追われる中で私は自分のことで一杯一杯で誰かを想うこと、大切な人とともに過ごす時間の尊ささえも忘れていた。そんな自分を王子さまはきつと「つまらない」と思うだろう。また、大きくなるほど、自分らしさが失われていくように思えた。みんなと変わらない存在で居られるよう同じになりたいと思う気持ちが強くなった。だからこそ、今までは好きだった読書もなくなり、今では本より携帯と向き合うことがほとんどだ。

物や人であふれる世の中で、目に見えるものがすべてで、みんなと同じようになるために「らしさ」を無くした自分は、きつとこれからつまらない大人の一になつていくのだろう。「自分らしさ」を大切に、自分だからできることを一つでも良いから欲しいと思うようになった。それが「自分以外の誰かのため」になることならもつと素敵だろう。その一つが今、この高専という場所で建築を熱心に学ぶことにつながるのだと思う。将来、自分が建てた物はきつと誰かのためになると思うからだ。そして、その誰かを想う気持ちを大切にしたいと思う。まずは、身近な人たちから、学校で過ごすクラスメイトや友だち、また地元からいつも応援し、自分のことを大切に思ってくれている家族の存在を胸に日々進みたいと思う。忘れそうになった時、いつでも思い出し大切にしたいこの本と共に。

## アルジャーノンに花束を

ダニエル・キイス 著

建築学科二年 横島 仁胡

あなたは賢くなりたいと思ったことがありますか

——「アルジャーノンに花束を」を読んで——

今回私が読んだ本は、賢くなるということが必ずしも良いことばかりに繋がるわけではなく、得るものもあれば失うものもあるということを教えてくれました。その題名を「アルジャーノンに花束を」と言います。

主人公は知的障害を持つ三十二歳のチャーリー・ゴードンです。チャーリーは伯父の親友が営むパン屋で働いていました。「ぼくわかしくなりたい」と、周りの人々に好かれようと、認められなかった彼は飛躍的に知能が発達する手術を受けます。その結果、チャーリーは天才となります。しかし、その知識や知能の急激な上昇によって、感情がつかないという現象が起こるようになります。そんなチャーリーはいろんなことを見てくるわけです。養護施設の先生が、子どもから見る大人、先生的な存在だったのに対して、恋愛の対象になります。また、チャーリーは気づいてしまいます。自分のことを好いてくれて、一緒に楽しんでいたはずの周りの人の笑顔は自分への嘲笑や軽蔑だったということ。彼が友達だと思っていた人たちは彼のもとを去っていきます。なぜでしょう。チャーリーはみんなと対等になれたのに、ようやく賢くなれたのに、友達を失ってしまうのです。精神障害者の時は馬鹿にされ、天才になったら嫉妬され、疎まれる。ここで私が特に気になった一言が、チャーリーが友達に放った「自分が優越感にひたって、自分の無能さに安住するためにぼくを利用したんだ。白痴にくらいれば、だれだって自分が聡明だと感じられるからね。」という言葉でした。なぜなら私もチャーリーの友達と同じよ

うに、自分と他人を比べ、安心することがよくあるからです。やはり人というものは、他人よりも上でありたいと思ってしまうものではないでしょうか。自分を甘やかして、他人を利用してしまふのです。チャーリーのこの言葉で、比べ合うことよりも、助け合い、励まし合うことのほうが、どんなに素晴らしいことなのかを再確認できました。

最終的にチャーリーは急激な勢いで多くの知能を失っていきます。手術は失敗していたのです。しかし、後退していくチャーリーは以前とは違う、人間性や愛情を理解できるようになったチャーリーです。優しさを心に抱えた彼の「哀れむな。後悔はしていない」という言葉には胸が苦しくなるような感動を覚えました。

そしてなによりも印象に残ったのは、この小説の最後の一文である「ついでに、どーかついでがあつたらうらにわのアルジャーノンのおはかに花束をそなえてやってください。」という文です。実験用のマウスであったアルジャーノンは言ってしまうとチャーリーにとつて同志のようなものです。精神障害者に戻る中で、同じ運命を共にしたアルジャーノンを慈しむ心や思いやりの心など、いろんな背景が最後の最後に凝縮されていて、胸を打たれました。

私はこの作品を読んで、人の幸せとは何かを考えさせられました。人の悪意を知らずに生きてきたチャーリーが、手術によって人並み以上の知能を得たにも関わらず、人からの悪意というものを知り、幸せとは遠い場所に行ってしまった。弱者は不幸せであるというのは勝手な思い込みであり、幸せを決めるのは他の誰でもなく、自分自身なのだということ、考えることができました。自分が幸せなことに他人の人生がどうかなどということは全く関係ないのだと。

チャーリーに学んだ優しさや愛情、幸せの定義をしっかりと持ち続けて、私はこれから人生を進んでいきたいと思えます。

## 広島の木に会いに行く

石田 優子 著

機械工学科三年 福井 健太

## 無言の語り

——「広島の木に会いに行く」を読んで——

受け継いでいくのは人間だけではない。これは私が「広島の木に会いに行く」という一冊の本を通して学んだことだ。

現在、広島での被爆経験を語り継げる人々の減少が懸念されているという背景を知った私は、図書館の本棚で原爆に関する本を眺めていた。表紙からでもあの日の惨状がひしひしと感じられる本が並ぶ中、その本は一風変わった雰囲気であったため目に留まり、気が付けば手に取っていた。語り継ぐことをテーマとしたものは人を中心において考えるのが普通だ。そう思っていた私にこの本は新しい世界を教えてくれたのだ。

まず表紙をめくると、カラーで彩られた「被爆樹木」のクスノキが広島城とともに立派にそびえ立つ姿で写真に写っている。この本はこうした被爆樹木、つまり被爆を経験した木とそれに寄り添ってきた人々の関係性が、ドキュメンタリー映像作家の石田優子さんによって記されている。その内容は被爆樹木の生い立ちや、それを守り続けている樹木医の堀口力さんを始めとした多くの人たちを軸にして展開される。木に徹底的に寄り添う姿勢で、丁寧にコラムや写真を交えながら凝縮して述べられているため、ノンフィクションを読み慣れていなかった私でも没頭して読み進められた。また、筆者の石田さんが特に詳しく描写する四季折々の被爆樹木のソメイヨシノが、瀕死の状態でありながらも色々な表情を見せる姿は様々な思いが湧いてくる。

私が特に印象に残っているのは被爆樹木がなぜ傾いているのかという研究を行っていた筑波大の鈴木雅和教授の話だ。研究によると、広島にて被爆した木は僅かに爆心地方向へ傾いているそうだ。これは吹き戻しという、原子爆弾の爆風で一時的に真空になったところに、空気が勢いよく集まる現象によって傾けられたと思われていた。しかし鈴木先生は、木は重力に必ず逆らう形で成長するため、吹き戻しの一時的な力だけでは傾かないと感じたそうだ。そして、爆発の熱線を浴びた爆心地側の木の細胞が損傷し、健常であった部分と成長の差が生まれたためと仮定付けた。メカニズ

ムとしては必然だったのかもしれないが、私には被爆樹木自身が爆心地を指すことによってあの日のことを静かに語っているように思えた。木は、来る日も来る日もその場に佇んでいる。そんな日常にある木が、あの日を物語る。例え人間が忙しく、膨大な情報量に埋もれる生活で忘れてしまってもだ。これこそ語り継ぐということなのではないだろうか、そう私は感じた。実際、私自身も木の恒常的な存在感には感銘を受けたことが何度かある。学校の校庭の木、通学路の木、祖母の家の木など周りが開発や荒廃によって変わりゆく中、その見慣れた思い出の木はいつも温かく見守っているのだ。その木を見ると、深くに眠っていた記憶が目覚ますように思い出されていく。この本が語る被爆樹木も似た印象なのだろうか。

被爆経験を受け継ぐ。これは広島人、それ以上に人として成し遂げるべき責任があると私は考える。しかしこれは言葉で紡ぐと同時に、動かずにじっと語り続ける存在を後世にも引き継ぐことなのだと思う。

## プラスチック汚染とは何か

枝廣 淳子 著

電気情報工学科三年 町 依落

「プラスチック汚染」から地球を救うためには  
——「プラスチック汚染とは何か」を読んで——

今回、僕は「プラスチック汚染とは何か」という本を選んだ。今日、地球温暖化、大気汚染など様々な環境問題が起こっている。中でも「プラスチック汚染」は自分達にとって最も身近で、解決する必要があると感じたため、この本を手にとった。

安くて便利なプラスチック。この本ではそのプラスチックが起こしている問題の現状を伝えている。それに加え、プラスチック汚染を減らすための世界の動向、これからの課題についても述べられ、僕たち一人ひとりがこの課題に取り組み、改善していかなければならないと感じさせる一冊である。

この本では様々な事実や主張が述べられているが、その中で特に印象に残ったものを取り上げる。最初に環境保護のためにプラスチックが多用されたという事実である。プラスチックが使用された初期の頃は野生動物の保護、軽量化による輸送時のCO<sub>2</sub>排出量の削減などが考えられていたらしい。現在、プラスチックは自然環境悪化の原因と考えられているだけあり、この事実にはかなり驚かされた。当時の目先の問題を解決する画期的な物が後に大きな問題を起こす元凶となったということだ。このようなことを起こさないためにも後のことを考えた研究・制作が必要だと考える。

次に環境・社会問題は独立したものではなく、つながっているという点である。「プラスチックさえなくなればよい」という考え方ではなく、さまざまな問題にどのようにつながっているかを十分に考えたうえで、手を打っていく必要があると述べてある。これはプラスチックのみならず、他にも共通して言えることで、現状を良くするために作った物、行ったことがさらに悪化させる可能性もあるということだ。自分は工業系で学んでいるため、いずれは物を開発、制作する立場になるかもしれない。その時に予期せぬ問題が発生するのを防ぐためにもあらゆる可能性を検証することが必要だと感じた。

最後にプラスチックごみを減らすために、ニーズを満たすことをやめるという考え方だ。つまり、レジ袋

に入れず手で持って帰る、鞆に入れて持って帰るや、ストローを使わずに飲み物を飲むといった取り組みだ。これはプラスチック汚染を防ぐ方法として、代替物の使用や海洋に浮遊しているプラスチックの回収など様々ある中でこの方法は最も簡単で誰にでもできることだ。僕はこの作文を書くため、原稿用紙を購入した。その際にレジ袋を受け取ってしまった。これはマイバックを持参する、または袋に入れずに持って帰ることでこのレジ袋を受け取らずに済んだはずだ。このようにこの方法は簡単だが個々の意識付けが大切である。その小さな意識付けが多くの人々に広まり、積み重ねることで、「プラスチック汚染」から地球を守ることができると思う。

僕がここで書いたことはほんの一部だが、企業や政府などが「プラスチック汚染」に様々な対策をとっていることが分かった。しかし、最後は一人ひとりが意識して取り組まなければこの問題は解決できないと思う。この本をできるだけ沢山のの人に読んでもらい、現状を知ってもらうことで、少しでもこの問題が改善されることを願っている。

## 沈黙の春

レイチェル カーソン 著

環境都市工学科三年 小田 悠人

## 技術者のあるべき姿とは

——「沈黙の春」を読んで——

この本の作者であるレイチェルカーソンは、ベストセラー作者でもあり海洋生物学者でもあった。彼女の他の作品いずれも詩情豊かな文章で親しみやすいものだと思う。

この作品は、環境の汚染と破壊の実態を世にさがかけて告発した本で、発表当時大きな反響を引き起こし、世界中で農薬の使用を制限する法律の制定を促すと同時に、地球環境への人々の発想を大きく変えるきっかけとなった。この本は初版後六十年になろうかとする現在でもなお版を重ねているロングセラーである。彼女が発した警告は、今日でもその重大さを失わず、そればかりか、さらに複雑に深刻になってきている環境問題への彼女の先見性を示している。

作品の内容は世界的にも知られているように、彼女は一九五八年一月、一通の手紙をうけとったことから「沈黙の春」を書かざるを得ないことになった。当時アメリカでは、化学物質が次々と開発され、実用化されていましたが、その危険性についてはあまりにも知られることなく、大量生産、大量使用されるという悪い状況にあった。なかでもDDTなどの殺虫剤が空中散布されるなどの無思慮な使用実態があった。この作品はこのような実態を告発するものだった。そして出版されるや直ちにアメリカ社会をゆりうごかすことになった。そして、危険な殺虫剤の使用に歯止めをかけることになった。

この「沈黙の春」は、人間中心の考え方・行動がいかに自然環境に影響を与えたかを実例を挙げて述べている。

この作品を読んで感じたことは、「殺虫剤はまったく無害です」と呼びかけるシステムが人間の悪い所だということだ。私が考えるに殺虫剤の研究者や関係者たちは化学薬品が空中散布されたらどんなリスクがあるのかということに気が付いていたのかもしれない。

もしそうだとしたらなぜ、声をあげて問題提起しなかったのだろうかと思った。口に出してしまったら、職を失うという恐れもあったかもしれない。皆が黙って

いるから自分も黙っていればよいという気持ちもあったかもしれない。もしくは、今更言っても現状を変えることはできないと諦めていた人もいたかもしれない。ただそうやって現実を目をつぶり、自分に都合の良い理由を見つけて自分を納得させても自分の恥や尊厳は欠けると思う。

近年、自己責任という言葉が浸透し、内部告発ということも言われるようになった。だが、もし自分がこの作品で取り上げられた研究者や関係者の現状に立ったら、声を上げることはできるだろうかと考える。日本にも公害は存在している。レイチェルカーソンが、汚染は人類そのものに関わる問題であり、そして人間の未来に関わる問題と訴えかけるたびに、自分自身の行動に恥じないように心掛けたと思う。

また、「沈黙の春」の最終章の冒頭の一節ではこう述べている。「私たちは、いまや分かれ道にいる。長いあいだ旅をしてきた道は、すばらしいハイウェイで、すごいスピードで酔うこともできるが、私たちはだまされているのだ。その行き着く先は、禍であり破滅だ。もう一つの道は、あまり〈人も行かぬ〉が、この行くときこそ、私たちの住んでいるこの地球を守れる、最後の、唯一のチャンスといえよう。」この文章から、未来は今の行動で創られるということが分かる。

この作品を通じて今のためだけの今ではないことを肝に銘じて、未来を感じ、未来の子どもたちのための自分の一挙手一投足を忘れずに行動したいと思う。

## プラスチックスープの海

チャールズ・モア,  
カッサンドラ・フィリップス他 著

環境都市工学科三年 山本 一稀

### 地球の命を食らうもの

——「プラスチックスープの海」を読んで——

「ほんの一世紀程前には、海は見る者を圧倒し、魅了する深い青だけが広がる絶景を見せていた。」と話す  
と驚かれる時代は、もう目の前まで迫っているのかもしれない。

今日では海を見渡せば醜いプラスチックゴミが否応なしに視界に入る。発明され普及してから半世紀でこれだ、大きな転換でもない限り自分が老人になった頃にはカラフルなプラスチックで覆われた人工の大陸が出来上がっている事だろう。

それが私の「プラスチックスープの海」を読んだ感想だ。

かつての豊かで秩序だった海を愛するチャールズ・モアはプラスチックで汚されていく海に心を痛み、海洋調査の財団を設立しプラスチック汚染の謎を解き明かす事を決意する、というのが大まかなあらすじだ。

私が特に大きな衝撃を受けたのはプラスチックの凶悪さについてだ。

プラスチックはそれ以前の木や金属、紙等と違い安くて丈夫で嵩張ることもない、という餌をちらつかせて企業に自らを依存させたが、その実体はとんでもないモンスターであり、海洋投棄によって環境中に入り込んだプラスチックは海の生命を貪り尽くす不死身の存在へと変貌するのだという。具体的にはプラスチック製の漁具は多数の魚や海鳥を巻き込み、ゴミは海に砕かれマイクロプラスチックになると魚達の餌に扮して自身の毒性を蓄積させる。

この事実を知って思わず恐怖を覚えた。人類が生み出した物だが、自分達より高度な生命であり今にも化物となって襲いかかってきそうな気がするからだ。というか、毒性が蓄積されている魚介を食べて、それが昨今の現代病の大きな原因なようだから、もう襲いかかってきていると言っていいかもしれない。

だが、それより恐ろしいのは流している当の本人の人間が未だに自制を知らず作り続け、最近では大部分が埋没処理されているとはいえ海への流出は収まる事がないという事だ。

作り続けられる全ての原因が結局の所、消費者である私達の需要があるためである事を踏まえると私達はプラスチックという合法ドラッグによって自分はおろか周りすら傷つける中毒者といっても良いだろう。私もそんな中毒者の一人だと考えると辟易する。

勿論、今日において何の対策も為されていない訳じゃない。

例えば某コーヒーチェーン店はプラスチック製ストローの廃止を始めている。他にも近年では生分解性プラスチックなる従来よりずっと分解しやすいプラスチックが発明され、普及し始めている。

しかし重要なのは消費者の選択であり、例え企業が環境保護路線を目指して開発しても私達が買わなければ、企業は慈善家なんかじゃないのだから路線を大量消費へ戻らざるを得ない。

とはいえ民主主義に生きる私達は酷く我儘で、誰かが環境保護を訴えた所で知った事ではないし、自分のためならポイ捨てだろうが厭う事はない。特に最近の若年層は。

だからせめてこれだけ皆の頭に留めて欲しいと思う。「あなたが捨てたプラスチックゴミは巡り巡って数百数千の生き物を殺し、やがてあなたにもその毒牙を突き立てるだろう」と。

私達が海洋汚染の実態を知って、少しは他へ労れる、プラスチックという怪物を退治できる地球のヒーローへなれることを私は望む。

## ドキュメント 豪雨災害

谷山 宏典 著

環境都市工学科三年 石川 穂乃花

### 経験から考えたこと

——「ドキュメント 豪雨災害」を読んで——

私が中学生の時に、広島土砂災害が起きました。テレビに映る住宅地が土砂に埋もれ、生活道路に川のように茶色い水が勢いよく流れていました。私にとって広島は野球観戦や買い物へ行く身近な街だったので、その映像が目に焼き付いて離れませんでした。受験や進路を考える際、「広島のような土砂災害の起こらない街づくりがしたい」の気持ちがあり、この学校への進学を考えました。

この本にある西日本豪雨は、私が通っている学校や寮も被害を受けました。私はバレー部の大会で山口にいたため、災害そのものを目にしたわけではありませんが、自分の無力さと自然の怖さを身近に感じた経験でした。

倉敷市真備地区、アルミ工場の爆発があった総社市、広島市矢野地区など、水害で被害を受けた方々が、雨が降り出し避難勧告が発令され、大きな被害を受けるまでの行動や、心の動き、そして助かった方々、また家族を亡くした方の声がこの本にはリアルに書かれています。

いろんなケースを読んでいくうち感じたのは、みんな危険な情報に対して楽観的であること、これぐらいなら大丈夫、自分に危険は及ばないと、根拠もなく思うのだということです。気象庁の会見で「百年に一度の災害が起こる可能性があります」と発表しても、それはどこかで起こるかもしれないけど、自分が住んでいる地域ではない。自分だけは大丈夫と思う気持ちがどこかにあるのだと思ったのです。

真備町の特別養護老人ホームで、入居者をすべて避難させ、成功例として報道された施設責任者も、その後、自身も施設に取り残されスタッフを危険に合わせってしまったことを悔やみ、「入居者を避難させた以外はすべて失敗だった」と語り、根底に岡山が晴れの国という意識、水がそこまで来ても、河川が氾濫したとか、堤防が決壊したという想像が広がらなかったと語っています。思い込みや、危機感のなさが自分たちの避難まで考えられなかった原因だったと述べていま

す。

西日本豪雨で大きな被害を出した広島県では、避難勧告・避難指示が二五六万人に出された一方で、実際の避難は1%未満だったという数字があります。市町村単位、地域別に出され、実際、避難指示が出た地域でも避難の必要のない人もいられるでしょう。とはいえ、1%の数字は、私の想像を超える少なさでした。過疎地域では人手も足らず、自力では避難できないお年寄りもいると思いますが、危機意識のなさ、自分だけは大丈夫の思い込みが表す数字だと愕然としました。

私はこの本を読み終わって、両親や弟と住んでいる街のハザードマップを見直しました。そして避難場所や避難経路について話し合いました。私は普段学生寮に住んでいるので、実際災害が起こった際に何も出来ないかもしれませんが、でも、家族の命を守るために、安全に避難できるように、被害を少なくするために考えることはできると思いました。

また、この本はコミュニティづくりの大切さも述べられています。私は小さい頃、近所の人にお会いしたら必ず挨拶しなさいと言われてきました。いつか母が、「災害や万が一の事があった時に、挨拶して顔覚えてもらっていたら、近所の人を助けを借りたり、自分が手伝い出来ることもあるでしょう。地域のつながりは大事なよ」と教えられたことを思い出しました。実際、地域のつながりは災害時、そしてその後の復興に不可欠な事なのだ、印象に残りました。

災害時の安全と、責任のある行動は何かを私自身に問いかけ、考えさせられる本でした。起こってしまう災害に対して、一人一人の危機意識の高さが命を守り、最小限の被害でとどめる一歩になる事を心にとどめたいと思いました。

## 戦争をやめさせ環境破壊をくいとめる新しい社会の作り方

田中 優 著

建築学科三年 外村 天音

### 「やめさせ」「くいとめる」社会

——「戦争をやめさせ環境破壊をくいとめる新しい社会の作り方」を読んで——

「戦争」「環境」という2つの言葉は別々の問題として取りあげられていることが多いのではないだろうか。「戦争をやめさせ環境破壊をくいとめる新しい社会の作り方」という本は、この2つが緊密に関係していることを教えてくれた。

私はこの本を薦めて頂き、手に取ったとき、「戦争」「環境破壊」という現代の社会で問題視されている2つの事に、戦争を「やめさせ」環境破壊を「くいとめる」という言葉が使われていることに興味をもった。本当にそれが可能なのだろうか。いけない、と言われている戦争はいつまでも世界のところどころで起き、環境負担軽減の対策が行われているのに地球温暖化は進むばかりである。本当に「やめさせ」「くいとめる」方法はあるのかと思ひながら読みはじめた。

この本にははじめ、なぜ戦争が起こるのか、その原因や社会のしくみが書かれていた。戦争の大きな原因は石油だという。紛争地と石油地帯が一致しているそうだ。アメリカとイラクの戦争が例にとられていた。アメリカが「石油価格の決定権」を得るために、戦争を続けようとする。そもそもなぜ石油が必要なのだろうか。石油は、生活するにあたり、とても重要な燃料だ。生活するため、つまり、生きるために石油をとり合っているのだと思った。石油を多く所有していると生活に困らない。つまり、「豊か」になれる。今起こっている戦争は「豊かに生きるための戦争」だと言えるのではないだろうか。

では、そんな戦争は、どう環境に関わるのであろうか。まず、大きな問題である、地球温暖化の原因になるのは、二酸化炭素である。二酸化炭素を排出する原因の一つは石油などの化石燃料で、いつか枯渇するエネルギーだと言われている。しかし、石油の代わりが全くないかと言ったら、そうではない。「バイオマス」という新たな、自然に還る燃料があるのだ。車であっても、電気自動車など、もう石油なしでも動く社会ができています。さらに、電気を使うのにも二酸化炭素を

排出してしまうが、電力を使うのを大幅に減らせる省エネの家電がある。初期コストは大きいですが将来的にはお金が節約でき、いつかは黒字になる。実は、もう環境破壊を「くいとめる」準備はできているのではないだろうか。石油というエネルギーが必要ではなくなることも不可能ではない。そうなったとき、戦争も不必要となり「やめさせる」ことができるのではないかと考えた。そのためには代替りのエネルギーが世界全体で広がって一体となり、地球に住み続けるための取り組みを進めなければならない。石油など、もう古いエネルギーだ。そんな、あえて言えば「流行後れ」のものにこだわらず、今はもう「豊かに生きるための取り組み」をはじめべきだ。「豊かに生きるための戦争」ではなく、戦争という手段では豊かになれないと、はやく気付くべきなのだと思います。

そして、悲しむべきことは、この本が二〇〇五年に発行されていたことだ。では、今の社会に当てはまることが多いというのはどういうことか。つまり、この社会は大きく変わっていないのだ。少しずつ変わっていつているのは分かるが、社会全体でまだ問題視され続けているのは、ほとんどの人々が、知って、行動に移さないからだと思う。知ることまではきっとできている人は多いのだと思う。しかし、動くのは難しいのだ。では、自分にできることは何だろう。答えは簡単なものだった。「自分から動く」ことだ。石油を使わないもの、省エネなもの、を意識するだけでも、社会を変えようとする一人になれる。実は簡単だったのだ。社会を動かしたいのなら、自分が動かす第一人者になれればいいと思った。そんな第一人者が増えていけば、「やめさせ」「くいとめる」社会が実現する気がした。

**令和元年度 校内読書感想文コンクール 講評**

## ○令和元年度選考委員

一. 二年選考担当 外村 彰

委員長・四年以上選考担当 田中 誠

一. 二年選考担当 上芝 令子

三年選考担当 小倉 亜紗美

## 読書感想文 総評

委員長 電気情報工学分野 田中 誠

読書感想文を書くのは大変です。私は国語の授業で読書感想文の書き方を教えていただいた覚えがありません。「普段から本をちゃんと読んでいたら感想文ぐらい書けるはずだ。」というのは、それが簡単にできる才能を持った方が国語の教師になったからだとしか思えません。自分の感動したことを伝えるのも、私なら200字程度が限界のように思います。

工業高専という、国語が得意ではなさそうなみなさんが、自分の感動したことを読み手に伝えることを考え、苦労して感想文を仕上げ応募していただいたことにあらためて感謝いたします。



## 一・二年読書感想文 講評

人文社会系分野 外村 彰

限りある人生、それぞれの人が一生のうちに体験できることは思いのほか少ないものです。読書は、そうした人生の手狭さを、さまざまな追体験によって豊かにしていきましょう。

とある主人公が、恋や旅や病気のような、多くは非日常の、かけがえのない経験をしてゆくなかで、読み手もまた登場人物の気持ちに共感することで能動的に彼らの世界を生き、時には人間や社会を問い、不条理な境遇や救われない魂をめぐって本のなかの人々と同様に悩み苦しむ、そうしていつしか人として成長を果たし、多様な価値観を受容するようになる。——豊かな可能性を秘めた、それでいて自己のありかを見定め難い、そんな未熟な若者が、大人になるに向けて感受性を錬成するには、読書のような人間修養の機会が必要だと考えます。

さて2019年度の読書感想文について、講評をしておきます。まず、今年的一年生。よく選ばれていたのは、「なめとこ山の熊」「グスコブドリの伝記」「ジキル博士とハイド氏」「アルジャーノンに花束を」「星の王子さま」「老人と海」でした。とくに「星の王子さま」「なめとこ山の熊」が多かったようです。——自分にとって唯一のバラを持ち、心の眼でこの世界を見つめられる人、苦難にあっても関りある対象の心に寄り添えるやさしい心根を持つる人になりたいものです。

続いて二年生について。多かったのは「海と毒薬」「人間失格」「地獄変」「奉教人の死」「銀河鉄道の夜」「鉄道員(ぽっぽや)」あたりでした。われわれの心の暗部——どの人の内面にもあるもの——を凝視し、「世間」との関わりない距離感に悩み、まっすぐに生きとおすこと、純一な魂を保ち続けることの困難さを胸に抱えている人が皆さんの中には沢山いるようだと感じました。

人生は問いに満ちています。そして一人一人にとって、それぞれに問う内容は異なっている。個々の抱える問いを、皆さんごとに追求して行ってください。そして答えは、人それぞれ。年齢や環境によっても違うでしょう。答えがうつろうのがほんとうだと思います。

そもそも、人間の内面ほど不安定で、揺らぎ続けているものはないと思いませんか。

人はなぜ生きるのか。どのように自分の人生をとらえ、自分なりの人生観を持つのか。その内実は個々によって様々です。答えはこの宇宙の一つではない、それを探るのが人生でしょう。

読書感想文のコツは自分の感動した(心ゆすぶられた)ことを、とくに「もし自分が主人公の立場なら」という視点から分かりやすく読み手に伝えるところにあると思われます。最初に疑問を提示して、登場人物の立場に自分を置きながら読みすすめ、最後にその疑問を解く(その答えが自分の感動のありか)、という流れがよき構成かと存じます。

次年度も自ら問い、自らの言葉で考える文章が数多く提出されることを期待しております。

## 三年読書感想文 講評

人文社会系分野 小倉亜紗美

2019年度は、昨年着任した私にとって、初めての読書感想文コンクールでした。お薦め図書リストは配布しましたが、「ノンフィクション作品等、現代社会に関する本から」という課題を出したので、どのような本を読んで、どのような感想を書いてくれるのか、楽しみしていました。その三年生に最もよく選ばれていた本は、1962年に発刊された「沈黙の春」でした。古い本ですが、現在の状況と比較して読んでいる人が多かったです。その他には、現在我々が直面している、地球温暖化や海洋プラスチック汚染、フェアトレードや平和に関する本を読んでいる人が多く、この機会に現代社会の授業で学び、気になっていた事柄について、深く学ぶ機会にしてくれたことを嬉しく思いました。

自分が気になったことを、分からないままにせず、関連する本を読み、学ぶことで、より深く、正確な知識を身に着けることができます。社会に出てから、このように学び続けることができるかどうか、その後の活躍の鍵を握っていると言っても過言ではありません。自分で考えられることには限りがありますが、多くの人と議論したり、本から学ぶことで、自分だけで考えるより、多角的・体系的に、知識や思考を深めていくことができます。

これからも、自分の成長のために、本を読んで学び続けてください。

## 行事報告 令和元年度ブックハンティング

学生会 文化環境委員長  
環境都市工学科四年 大迫雄馬

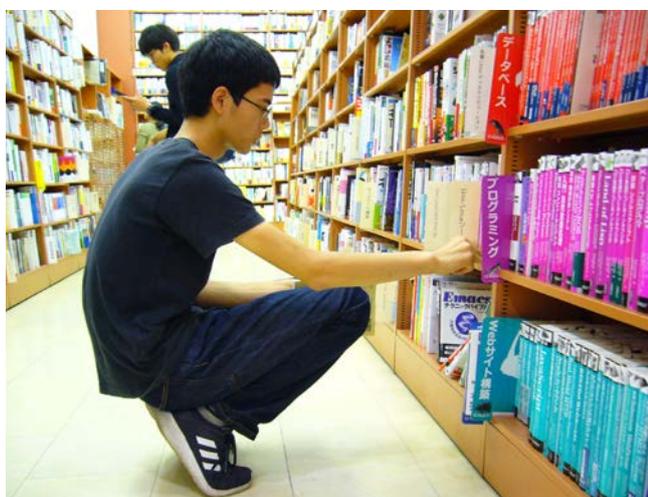
6月16日(日)に、ジュンク堂広島駅前店にてブックハンティングを行いました。  
各クラスから2名ずつ来ていただき、予算一万円程度で読みたい本、図書館に置きたい本を選んでもらいました。

小説はもちろん、資格試験やTOEICの参考書や趣味に関する本、中にはビジネス書や洋書などを選んでいる学生もあり、非常にバラエティに富んだ選出となりました。

一万円分の本を自由に選べる機会はなかなかないと思うので、今年参加できなかった学生は来年度参加してみてはいかがでしょうか？

また予算は後援会の方から出していただきました。

誠にありがとうございました。



## ブックハンティング図書紹介

### バカとつき合うな

O. Y.

時代の最先端を行く2人の生き方は非常に参考になると思ったので選びました。

### モンスター

E. H.

この物語には、自分の容姿にコンプレックスを抱くある1人の女性の人生がリアルに描かれています。この本全体を通して、コンプレックスに焦点をあてており、コンプレックスを持った人が自分に対してどのように向き合えばよいかや、そのような悩みを持った人に対する向き合い方を考えさせられる内容になっています。

### ベクトルが面白いほどわかる本

K. K.

僕がこの本を選んだ理由は、ベクトルは苦手な人が多いと考えたからです。

物理でも周りでベクトルが苦手と言う声がたくさん聞こえてきました。だから、この本を使って1人でも多くの方がベクトルを理解してくれたらいいなと思い、この本を選びました。

### AI vs 教科書が読めない子どもたち

U. T.

現代ではIT分野などが急速に発展しています。けれども何か代償を人々は払っているかもしれないと私は思います。

この本を選んだ理由は、AIの目覚ましい発展と影響について考えるきっかけになってほしいと思ったからです。

### ボダ子

M. T.

この小説は、「62歳、住所不定、無職」の新人作家、赤松利市さんにより執筆されました。住所が無いため、日雇い路上生活をしながら、漫画喫茶で執筆されたそうです。

「自分はなぜ、このような境遇におちいったのか」彼の著書はすべて自身の話であり、僕は彼の人生が気になり、この本を選びました。

### 5日でわかる構造力学

T. A.

私は構造力学が苦手なので詳しく書いている参考書がほしいと思いました。長期休暇の間に時間をとって勉強したいです。5日でわかるようにまとめられているのか興味をもちました。

### A Brief History of Time From The Big Bang to Black Holes

C. I.

英語の読解能力を伸ばしながら、科学的な知識を広げたい方にお勧めです。特に宇宙に関する疑問があれば、もしかするとこの本が答えてくれるかもしれません。

我々が住んでいる銀河系という宇宙に関するニュートンとアインシュタインの定理を確認すると共に、宇宙の核と時間との関係にある秘密を発見するスティーヴンホーキングの宇宙の世界に入りましょう。

### アリエナイ理科ノ大事典

Y. Y.

強カストロボやテスラコイル自作など真似出来ない危険な実験が多数収録されています。

実験内容は危険でも基本的な理論は同じなので理解の助けになるかもしれません。

### これ一冊でデザイン力が劇的に向上する間取りガイド

Y. S.

将来、建築士になった時に必要となった時に必要となってくるデザイン力をつけるためには実際に建てられている建物の良い所を参考にしながら学ぶことが大切だと思ったので、この本を選びました。

### きみを嫌いな奴はクズだよ

I. N.

短歌集です。

長い文章を読むのが苦手な方でも手に取りやすいかな、と思いました。

1ページに1つだけ歌が書かれているので、たくさん余白部分はこれを読んで膨らんだ考えを自由に埋めてみて下さい。

### 農村DX革命

H. R.

現在農業従事者の減少が深刻化しており、その深刻化する現状を打開するための方法の一つとして農業機械の「とある技術」にふれられており、とても興味をひかれました。

### 座右の寓話

I. M.

昔話から学べることは多いと思います。

この本では、古今東西さまざまなジャンルの寓話が88話収録され、それぞれに筆者の面白い見解が書かれています。楽しく知識を増やし、ユーモアを磨けそうだと思います。

**お弁当のセカイ**

S. M.

朝急いでパパッと特に考えずつくったお弁当にも奥深さがあることを知りました。  
もっと食事に気を遣おうと思いました。

**人には聞けない恋愛心理学入門**

N. T.

僕は最近インキュで心理学関係に興味を持っています。  
そこで、呉高専の図書館の蔵書を調べてみたところ、恋愛に関するものが少なく、面白そうな本があったので選びました。

**学問からの手紙**

A. T.

私は、試験が近づくとなんのために勉強しなくてはならないのか、と思っていた。  
それに対する答えとなる考え方を知りたいと思ってこの本に興味を持った。

**名前探しの放課後**

Y. S.

この本の著者である辻村深月さんは私たちの年代の目線の作品が多く、読んでいくたびにいろんなことを考えさせられるような作品が多くあります。  
他にもすばらしい作品がたくさんあるのでぜひ読んでください。

**恋する寄生虫**

H. T.

あらすじを読んで、「虫によってもたらされた恋」という言葉に惹かれ、この本を選びました。  
この作品の作者である、三秋縊さんの小説が好きなのですが、私自身この本を読んだことがなく、皆にこの作者さんの本を読んでもらう良い機会だと思い、選ばせていただきました。

**海の見える理髪店**

I. R.

この本は家族の物語が書かれている本だとあらすじに書かれていました。  
私はこの家族というキーワードにとっても惹かれ、こういった形で家族のドラマが書かれているかすごく気になったので、この本を選びました。

**コンパイラ 原理・技法・ツール 第2版**

K. S.

この本はコンパイラ解説本として非常に高い評価を受けている“ドラゴンブック”の第2版です。  
コンパイラの入門から本格的な開発まで幅広くカバーされており、自分でコンパイラを作りたい方は必読の本です

**シド・ミード ムービーアート**

N. N.

世界的工業デザイナーで、“ビジュアル・フューチャリスト”として、数多くのクリエイターや作品に影響を与えてきたシド・ミード氏の映画のコンセプトアートの集大成。  
シド・ミード氏は映画『ブレードランナー』をはじめ、数多くの映像作品で新しいイメージを創り出し、日本では、『Vガンダム』の主要モビルスーツのデザインを担当。  
機能的で流れるようなラインはとても美しいので、デザイナーに興味のある方は必読。

**東大生の元素ノート**

N. T.

僕がこの本を選んだ理由は2つあります。  
1 つ目は、周期表が覚えやすいからです。それぞれの元素を覚えるコツや特徴が書いてあるので、楽しく覚えられると思います。  
2 つ目は、手軽に読めるからです。寝る前などに少し見て覚えたり出来ると思ったので、この本を選びました

**奇跡の脳—脳科学者の脳が壊れたとき**

Y. S.

努力の末に脳科学の専門家になった筆者は、ある日37歳で脳卒中に襲われる。左脳の機能が崩壊し、体の自由もきかなくなるが、8年間のリハビリやその他の辛い経験から筆者が得たものとは？筆者の実体験に基づいた闘病記。

**トリノトリビア**

A. A.

私は鳥が好きです。とてつもなく好きです。これは身近な鳥の生活ぶり（恋愛や子育ても！）の4コマ漫画です。  
この本で鳥好きが増えたら思惑通りです。身近な存在、鳥を好きになれば見える世界がちょっと変わりますよ！

お知らせ

## 図書館リニューアル



図書館外観（完成予想図）

図書館棟の改築に伴って  
2020年度、図書館も新しく  
リニューアルします。  
開館は夏～秋頃を予定し  
ております。  
新図書館もどうぞよろし  
くお願いいたします。

## 貸出回数上位ベスト10

順位	題名	著者
1	蜜蜂と遠雷	恩田陸
2	君の臓腑をたべたい	住野よる
3	また、同じ夢を見ていた	住野よる
4	TOEIC L&R test出る単特急金のフレーズ	TEX加藤
4	第1部:騎士団長殺し	村上春樹
4	か「く」「し」「ご」と「	住野よる
7	はじめて受けるTOEIC L&Rテストパーフェクト攻略	松野守峰、根岸進
7	はじめてのAndroidアプリ開発	山田 祥寛
7	みんなが欲しかった!宅建士の教科書(2017年度版)	滝澤ななみ
7	孤狼の血	柚月裕子

(調査対象期間：平成31年4月1日～令和元年9月20日)

## 【表紙写真撮影者コメント】

豪雨の影響で二年振りの開催となった花火大会。呉の夜に大きな花が咲きました。

(機械工学科1年 杉野蒼空)

## 編集後記

今年度は図書館棟の改築により長期にわたる閉館を行い、利用者の皆さんには大変ご不便をおかけすることとなりました。新しい図書館となりましてからも皆さんに喜んでもらえるような図書館づくりに努めたいと思います。